

毎日が、散歩の途中

Sさんのこと

文と絵 岡本杏子



杏

しとしと降っていた雨があまり、雲のあいだから日が射してくると心が湧き立つ。雨を浴びて潤った草木が光の中で輝きを増して、目をとめずにはいられない。

私にはこんな季節に懐かしく思い出す人がいる。ある美術館の事務室でアルバイトをしていたとき隣の席にいた女性、Sさんである。当時私は二十歳そこそこ、彼女は三十路もなかばだったと思う。

関係者に寄贈する図録の発送がSさんの担当で私はその補佐。当時は職場の教人しかワープロを扱えず、封筒の宛名は全部手書きだった。大量の図録の山を目の前から消すことだけを考え、機械的に住所と名前を書き写す私の横で、Sさんは一筆一筆、丁寧にたたためた。「あら、ちょっとバランスが悪くなっちゃった」などと言いつつ、単純作業にあくびが出てくると、Sさんはよく「休憩し

ましよ」と言った。そんな時、彼女は机の上に白い紙を広げて優雅に鉛筆を削り始める。カッターを探る手元からパラパラとこぼれ落ちる木屑と黒い粉。赤鉛筆、青鉛筆も順番に削り、紙をゆすって削りかすを真ん中に集めると、指で私をつつく。「ね、見て。きれいな色」。

美術館には広い庭があり、Sさんは自分の職場に付随したこの庭を誰よりも知っていた。仕事前や昼休みにカメラ片手に歩き回り、独特の視点で世界を切り取っていた。職場では仕事が遅いとか変なところとか言われて少しいやっていたが、浮いた存在だったのが、感性が高くて、世界にひそんだ「きれいなもの」を見つけた才に長けた彼女が私は大好きだった。

ある昼休みのこと。事務室でお弁当を食べていた私のところにSさんが飛び込んで、「ね、来て！」と子供の

ように嬉しそうに笑った。くつついて外に出ると、朝からの雨は止み、日が射している。急に立ち止まった彼女が指差したのは足元の緑の芝生。わからなくて戸惑う私に、「しやがんでみて」とたたみかけると、芝生をじっと見ていると、ソソソと伸びた緑の芝のあいだに、うす桃色のまあるい頭をのぞかせた小さなキノコがたくさん生えていた。

ほんとだ、かわいい！ 私たちは目を合わせて笑った。雨上がりの一瞬だけ姿を見せるそのキノコを毎年ひとりで見ているけれど、今年は一緒に見てくれる人がいて嬉しい。そう言ってくれたSさんとの思い出は、今でも梅雨の晴れ間のように私の心をばつと明るく照らすのだ。

岡本杏子(おかもと きょうこ)
神奈川県生まれ、世田谷区在住のライター。店舗・住人・人物の取材執筆を得意とする。今までに経験した職業は安産室や写真家秘書などアルバイトと正社員を含めて20を超えるが、ライター業は15年。数多しと動物をよなく愛する。一女の母。

特別寄稿

古びたボルシチの味

朝日新聞社 牧野 愛博

5月末、ロシア極東のハバロフスクを訪れた。人口50万人余。アムール川(黒竜江)を挟んで、中国の対岸にある街だが、道行く人にアジア系の顔は殆ど見られない。学生時代だった20数年前、シベリア鉄道に乗るためにこの街を訪れたことがある。ソ連時代だった当時、強制的に指定されてインツェリスホテルに泊まった。当時、食堂のメニューにビールがなく困惑したことを思い出した。

懐かしくなって、昼食を摂りに出かけた。日曜日の正午過ぎとい

うのに、ホテルのなかには閑散としていた。1階の食堂のドアは曇りガラスで、中の様子はうかがえない。ドアを開けると、誰も客がいなかった。座っているのは赤い制服のウエイトレスだけ。帰ろうかとも思ったが、英語で「お店はやってるのか」と聞くと、大丈夫だと言う。覚悟を決めて席に座り、ボルシチ(ロシアのスープ)とシヤガイモ、そして念願のビールを注文した。全部で500ルーブル(約1500円)くらいだった。

ロシア製のビールは美味しかったけれど、ボルシチがいけない。冷めているし、中身が安物のハム。オマケにハムを包んでいたとみられるビニールの切れ端まで入っていた。いちいち、英語でケンをするのにも疲れるし、黙って食事をした。その間、訪れた客は2人の男性と、ロシアのトレーニンクウエア姿の選手団10数人だけだった。

翌日、ロシア人通訳にこの話をすると、「あそこは駄目だ。絶対に行かない」と笑われた。確かに彼が連れて行ってくれた大衆食堂のボルシチは、インツェリスホテルの5分の1の値段で、味は数倍良かった。

ソ連時代、国抱えのホテルとして、努力しなくても外貨を持つた外国人客が次々訪れた。混乱はあるものの、経済が回復・成長しつつあるロシアのなかで、取り残された存在と言えるのかもしれない。

町ネタ

東西南北

大英博物館 古代エジプト展

7月7日(土)〜9月17日(月)・(祝)
森アーツギャラリー(六本木ヒルズ 森タワー52階)
05777-8600(ハローダイヤル)
一般1,500円(展望台・森美術館とのセット券)一般2,600円

古代エジプト人は、人は死後に冥界の旅を経て来世で復活すると考えていました。様々な試練が待つ旅路で死者に守護の力を与える呪文集として作られたのが『死者の書』です。その多くは美しい文字や挿絵で彩られたパピルスの巻物として死者に捧げられました。

本展は世界最長37頁の『死者の書』、『グリーンフィールド・パピルス』の全容を日本初公開するほか、ミイラや棺、護符、装身具など約160点で、古代エジプト人の死後の世界観や、来世へといたる旅の内容を紹介しています。

作品はすべてイギリス・ロンドンの大英博物館から出品されます。大英博物館は、1753年に創設された世界最古の国立博物館で、所蔵作品は800万点以上に上り、年間の600万人が訪れます。特にエジプト部門は、有名なロゼッタ・ストーンをはじめ、貴重なミイラや棺、副葬品、膨大なパピルス文書など10万点以上を擁し、質量ともに世界屈指のコレクションに数えられています。大英博物館の誇るエジプト美術の粋を集めた本展で、古代エジプト人が祈りを込めた来世への旅路の追体験をお楽しみください。

大黒庵 書道教室 生徒募集

◎初めて書道をしてみたい方
◎大好きな書道をしたい方
◎基礎からしっかり習いたい方
お気軽にお問合せください。
1回1,500円 月2回 13時~14時30分
持ち物:硯・墨・下敷・文鎮・大筆小筆・半紙

03-3910-9675

講師 原田 笙舟(しょうしゅう) (財)日本書道教育学会師範
教室=大黒庵(豊島区巣鴨4-13-24 とげぬき地蔵通り入る)
お気軽にお問合せください。



巣鴨地蔵通りの賑わいを一筋避けた安らぎの空間
猪・牛舌を焼き、伊勢直産の魚介類、温野菜、冷野菜など、他では味わえない逸品の数々も!!

◆昼の営業(前日までに予約)
ランチタイム(11:00~15:00)
¥1,000円 (メニューは日替わり制)

◆夜の営業(3日前までに予約)
17:00~23:00
¥3,000円
¥5,000円
(あつとおどろく豪華おまかせで、創作料理をお楽しみください)

かくれが大黒庵
豊島区巣鴨4-13-24
03-3910-9675

賞教室のご案内
お茶、お花、着付教室などのお稽古各種サークル活動に最適! 時間その他お電話にてご相談下さい。

アメーバブログ
ameblo.jp/shop-big1
で大評判

巣鴨地蔵通り商店街
●マルキヤ
●ちほら美術館
★大黒庵